



館長だより

山形県産業科学館

令和7年12月22日(火)

発行 館長 加藤智一

クリスマスを彩る三つの歌



12月になると、寒さの中にも、街の空気はどこか柔らかく変わっていくのを感じます。イルミネーションの光が冷たい空気に溶け、行き交う人々の足取りも、ほんの少しだけ軽やかになるような気がしませんか。そんな季節の移ろいを決定的に感じさせるのが、クリスマスソングの響きではないでしょうか。なかでも、冬を象徴する三曲、山下達郎の「クリスマス・イブ」、松任谷由実の「恋人がサンタクロース」、そしてジョン・レノンとオノ・ヨーコの「Happy Xmas (War Is Over)」は、単なる季節のBGMを超え、文化そのものに深く根を下ろしているように思います。それぞれの曲が持つ背景や逸話を辿ると、音楽がどのようにして「季節の記憶」を形づくるのかが見えてきます。

まず、日本のクリスマスソングの王者とも言える山下達郎の「クリスマス・イブ」。1983年に発表された当初は、実はそれほど大きなヒットではありませんでした。しかし、1988年にJR東海の「ホームタウン・エクスプレス」キャンペーンに起用され、あの名作CMとともに一気に国民的な曲へと昇華しました。雪の降るホームで恋人を待つ女性の姿は、昭和末期の都市生活の象徴として多くの人の心に刻まれました。興味深いのは、この曲が日本で最もチャートに長く居続けた曲としてギネス記録を持っていることです。毎年12月になると自然に売上が伸び、ランキングに戻ってきます。つまり、曲そのものが「季節の風物詩」として機能しているのです。また、山下達郎自身が「クリスマスソングを作るつもりはなかった」と語っているのも面白い点です。彼が意識したのは、むしろ「冬のラブソング」としての普遍性でした。だからこそ、特定の宗教的要素や派手な祝祭感を避け、静かな夜の情景と切ない恋心を丁寧に描いたとも言えます。その結果、クリスマスの喧騒とは対照的な「静けさ」が曲の魅力となり、長く愛される理由になったのではないでしょうか。

対照的に、松任谷由実の「恋人がサンタクロース」は、クリスマスの華やかさとユーモアを前面に押し出した曲です。1980年のアルバム『SURF&SNOW』に収録され、映画『私をスキーに連れてって』で再び脚

光を浴びたことで、冬の定番曲として定着しました。ユーミンの歌詞は、少女の視点から大人になる瞬間を軽やかに描き出しています。子どもの頃は空想の存在だったサンタクロースが、成長した自分の恋人として現れる。この比喩は、恋愛のときめきとクリスマスの魔法を巧みに重ね合わせているようです。さらに、この曲が象徴するのは、1980年代の日本に広がった「スキー文化」と「クリスマスのロマンチック化」です。バブル期の都市生活者たちは、雪山でのレジャーや華やかなデートを楽しみ、その背景にはユーミンの音楽が流れていきました。つまり「恋人がサンタクロース」は、単なるクリスマスソングではなく、当時のライフスタイルそのものを象徴する文化的アイコンでもあるのです。

そして、三曲の中で最も世界的な広がりを持つのが、ジョン・レノンとオノ・ヨーコの「Happy Xmas (War Is Over)」です。1971年に発表されたこの曲は、反戦メッセージをクリスマスソングの形式に乗せるという大胆な試みでした。タイトルにある「War Is Over」は、当時のベトナム戦争に対する強い抗議の言葉であり、曲全体が「もしあなたが望むなら、戦争は終わらせられる」というメッセージを繰り返し訴えています。興味深いのは、この曲が「プロテストソング※でありながら、世界中で愛されるクリスマスソングになった」という点です。通常、政治的メッセージを含む曲は時代とともに風化しやすいものです。しかし「Happy Xmas」は、子どもの合唱や柔らかなメロディによって、メッセージが普遍的な祈りへと昇華されています。クリスマスという「平和を願う日」と、反戦というテーマが見事に重なり、時代を超えて歌い継がれる曲となったのです。

こうして三曲を並べてみると、クリスマスソングが単なる季節の音楽ではなく、時代の空気や社会の価値観を映し出す鏡であることがわかります。山下達郎は「静かな恋の情景」を、ユーミンは「都市の華やぎと成長の物語」を、ジョンとヨーコは「世界への祈り」を、それぞれの曲に込めました。私たちが12月になると自然にこれらの曲を思い出すのは、単にメロディが美しいからではなく、そこに自分自身の記憶や願いが重ねられているからではないでしょうか。

※プロテストソング：社会問題・政治問題・戦争・差別・貧困などに対して、抗議や問題提起を行うために作られた歌のこと。